

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2025年10月のなかごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！

今年の十五夜は10月6日でした。お天気が良くなかったのですが、短い間、満月が雲間から顔を出してくれました。11月2日は十三夜。「後の月」と言って、日本に古くからあるお月見の行事です。ちなみに十五夜は中国から伝わってきた行事です。昔の人は満月になる少し前のちょっと欠けている月を美しいと愛でていたのですね。お月さまの絵本、今回も紹介しています。

では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



●『おつきさま こっちむいて』

片山令子・文 片山健・絵 福音館書店 1,100円/2010年

秋は空気が澄んで、星や月がきれいに見えるころです。小さな人たちはお月様が好きなようです。ある日の夕方のことでした。孫のかーくん（2、3歳ぐらいだったかしら）がママに強く叱られて泣いていたので、「お散歩に行こう」と誘ってみました。私たちは秋の虫の声に耳を澄ましたりして、あちこち寄り道しながら歩きました。か

一くんの涙もすっかり乾いたので、私が、「どうしよう。知らないところに来ちゃった」と言ってみたら（意地悪な祖母ですね）、かーくんが、「おつきさまがいるからだいじょうぶだよ」ってにっこりして言いました。その時見上げたお月さまは、ちょうどこの表紙のような形でした。

この絵本を読んだ日は空にお月さまを探したことでしょう。（須藤）



●『ばけばけ はっぱ』

藤本ともひこ・作 ハッピーオウル社 2012年(重版未定)

秋は紅葉が楽しみです。木々の葉も気温が高いので戸惑っているかもしれません、しだいに美しく色を変えていってくれると思います。

ページを開くと、いろんな色、いろんな形の葉が画面いっぱいにわざわざ重なっています。「ふーって はっぱをふけるかな。ふー ふー ふーーっ！」。勢いよく、ふーっをして、次のページをめくると、あら、怪獣。あら、ライオン。いろんなものたちがあらわれます。葉っぱを拾いに行きたくなる！写真絵本です。

(須藤)



●『エンソくん きしゃにのる』(今回の近藤セレクト2冊は、特に幅広い対象です♪)

スズキコージ 作(こどものとも傑作集 福音館書店) 1990年/1100円

絵本の絵だけ見て、「これは長新太さん！」「五味太郎さん！」「林明子さん！」となってしまうのはきっと、“絵本あるある”なことでしょう。そしてこの絵本の作者「スズキコージさん」もまた、そんなおひとりだと思います。

エンソくんが汽車に乗って終点までひとり旅。いなかに住むおじいちゃんに会いにいきます。途中、羊飼いの若者と一緒にヒツジたちが乗り込んできて(!)、旅は道連

れ、のんびり気ままな汽車の旅。それにしても、いったい何頭いるのかわからないヒツジの存在感たるや。あまりの斬新さに思わず目を見張る、エンソくんのお弁当にもぜひご注目を。

からだ奥の感覚がくすぐられる？引力強めなスズキコージ・ワールドにどっぷりひたる、楽しい絵本時間を親子でどうぞ。（近藤）



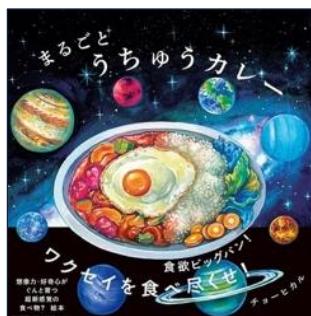
●『つきみのまつり』

羽尻 利門 作（世界文化社） 2023年/1540円

秋の夜。十五夜お月さまを心待ちにしているのに、お月さまは雲の中。「♪でーない でーない つーきーがー」と歌う姉弟を、お母さんが神社のおまつりに誘います。ロープウェイに乗って着いた境内では「かんげつさい（観月祭）」が行われる直前で、子どもの巫女さんが案内してくれました。しばしおごそかな時間が流れるも、ふと気づけばなんと、森の動物たちもやってきて！？…やがて雲も晴れ、待ちに待ったお月さまが、打ち上げ花火といっしょにあらわれました。ラスト2ページいっぱいに収まりきれない満月は圧巻！いまこそ高らかに歌いたい「♪でーたー でーたー つーきーがー」

物語を楽しんだ後には、文字探しもワイワイ楽しんじゃいましょう。各ページに作者の遊びゴコロが。「おつきみ」の4文字がバラバラにかくれているのですよ。（近藤）

② 年中・年長組のみなさんに。



●『まるごとうちゅうカレー』

チョーヒカル・作 PHP 研究所 1650 円/2023 年

なんてスケールの大きなお話しでしょう。ある幼稚園で、年長組がプラネタリウムを行ったことをきっかけに、子どもたちが星に興味を持ったので、先生がこの絵本を読んであげたそうです。まずは、かいおうせい、どせい、かせい、きんせい、すいせい、もくせいを、サクサク、シャッシャッシャッ、ぼろぼろ、ベリベリと、下ごしらえ。フライパンで色が変わるまで炒めたら……。そのあとはぜひ絵本で楽しんでください。地球はどうなる？太陽は？月は？ なんと言っても、てんのうせいがすごいことに。

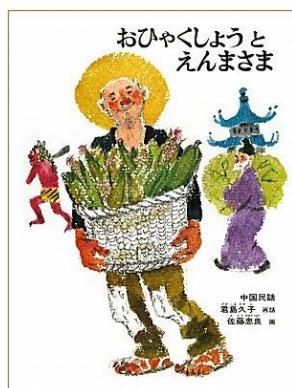
園ではこの絵本からカレー作りに発展し、「ほしざらジャム」を作る活動に繋がったそうです。それにしても、「うちゅうカレー」はどんな味？（須藤）



●『どーんとやさい ごろんずっしり さつまいも』

いわさゆうこ・作 童心社 1,320 円/2022 年

さつまいものおいしい季節になりました。駒場幼稚園でもお芋掘りに行きますが、今年の収穫が楽しみですね。この絵本は「どーんとやさい」シリーズの一冊です。表紙に芽が出ているさつまいもが一本。「ごろーん さつまいも あっ めがでてる！ うえてみよう」から始まります。さつまいもが、どんなふうに育っていくのかをわかりやすい文と丁寧な絵で教えてくれます。さつまいもの種類やさつまいものように土の中で育ついろいろなもの紹介もあります。畑で育つさつまいもの姿が想像できて、お芋掘りが楽しみになる絵本です。（須藤）



●『おひやくしようとえんまさま』

中国民話 君島久子 再話 佐藤忠良 絵 (福音館書店)

2011年/880円 ※重版未定

えんまさまのお祭りの日。「おそなえ物が一番少ない百姓をこらしめろ」と、えんまさまは手下の鬼に命じます。そこで鬼たちは、そのお百姓が植えようとしていた稻が実らないよう、「あたまひょろひょろ、ねっこむっくり」と呪文を唱えるのですが、この悪だくみを見聞きしていた堂守りのおじいさんが急ぎ先回りでお百姓に伝えます。そこでお百姓は稻をつくるのをやめ、鬼の呪文通り…頭がひょろひょろ根っこはむっくり…生長する里いもの苗を植えたので、里いもは大豊作。こんな具合に、お百姓は鬼たちの呪文を逆手にとって、次々と様々な野菜を実らせます。いよいよ最後には、「あたまむっくり、したはひょろひょろ」の呪文通り、畠は黃金色の稻穂でいっぱい、お米は大豊作～。

時を越えて語り継がれる本格昔話はどっしりと骨太な物語世界。読み手聴き手を深く楽しませてくれてありがとうございます。(近藤)



●『夜をあるく』

マリー・ドルレアン 作 よしい かずみ 訳(B.L.出版)2021年/1760円

表紙の丸い帯に書かれているのは「真夜中にはじまる しずかな冒険」。晩夏の真夜中、主人公家族は「やくそく」を果たすべく、4人全員で外に出て“夜を歩き”始めます。頼りになるのは足元を照らす懐中電灯だけ。暗がりの中で研ぎ澄まされていく感覚。虫の鳴き声・植物の匂い・家々に灯る電気の明るさ…。やがて、さらに真っ暗な森の道を注意深く歩き、夜の湖や月や満点の星空に見とれ…岩山を登り切ったあにつきに、「やくそく」の日の出をむかえるのです(まるでごほうびのラスト2ページまで目が離せない)。

“暗い夜”だからこそ、鋭くなった感覚を共有し、見えるものの驚きとよろこびに共感します。紺色と黄色の2色がほぼメインの配色にもかかわらず、驚くほど豊かで繊細なニュアンスをふくんでいて飽きません。清潔感と品を兼ね備えた美しさを感じるフランスの絵本。明るさと暗さは光と闇でもあると思うと、人生に通じているような

気もして、なんだか心がシンと鎮まります。

やっと暑さも落ち着きましたね。たまには家族で「夜をあるく」のも…うん！いいかも♪(近藤)

③ 大人のみなさんに。



●『丘のうえのいっぽんの木に』

今森光彦・作 童心社 1540円/2019年

今森光彦さんは、琵琶湖をのぞむアトリ工を拠点に自然と人との関わりを「里山」という空間概念でとらえ、「昆虫記」(福音館書店)「里山物語」(新潮社)などを発表しています。写真家であり、切り絵作家でもあります。この絵本は白黒の切り絵で、エノキの木に生まれたオオムラサキの幼虫が成虫になりさらに命を繋いでいく様子が描かれています。

オオムラサキは1957年に日本昆虫学会によって「国蝶」に選ばれました。10センチ以上になる大きなタテハチョウで、オスの羽根は美しい紫色に輝くそうです。幼虫はエノキの葉を食べ、成虫はクヌギなどの樹液を吸います。表紙に描かれている「人」の姿に、日本を代表する蝶が生息する里山を守っていかなければいけないという今森さんの意思を感じました。(須藤)



●『ゆうやけにとけていく』

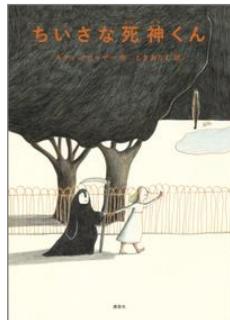
ザ・キャビンカンパニー 作 (小学館)2023年/1870円

すごい絵本です。ほとぼしの生命力と奥深い包容力が一体となって、あざやかで美しく、静かで深い。この絵本に出会った時、ああ、新しい名作が生まれたのだなと確信して、ボーッとしました。主な賞を次々受賞する新進気鋭の作者。そのセンスと力量がまぶしいです。

「ゆうやけは どんなこの ところにも やってくる」「ゆうやけは やさしい おとがする」誰かの笑い声も、誰かの思い出も、誰かのなみだも「ゆうやけに とけていく」。簡潔で優しく詩的な文章と、それぞれが唯一無二の輝きと自由さを発する色が溶け合い、絶妙に懐かしい。最後のページでは「そこ ここ でいきるひとびとの きょういちにちの よろこびとかなしみ」が基になってつくられるもの…が、夕焼け空の後に広がります。さて、それは何だと思いますか？ ぜひ、読んでみてくださいね。(近藤)

＊＊＊コラム＊＊＊ 本の部屋からこんにちは・近藤千春

先日の移動図書館・終了後。本の部屋で、お手伝いのお母さんたちと話す機会がありました。我が子が【死ぬ】【食べられる】ことに強い不安を持っている…と、ひとりのお母さんが相談してくださったのがきっかけです。“【死】という概念を、子どもとどんなふうに共有すればいいのか”…とても大きなテーマですよね。その時、真っ先に思い浮かんで紹介したのがこの絵本でした。



『ちいさな死神くん』 キティ・クローザー作 ときありえ訳

(講談社) 2011年/1430円※重版未定

「それならお子さんにこれを読んであげて」というより、心配を抱えるそのお母さん自身と共有したい気持ちがありました。

かつてわたしも若い母親だった頃、園児だった長男が「ママはボクよりも先に死ぬんでしょ？いやだ！」と急に大泣きしたことがあります。はぐらかしたりごまかしたりせず、けれど安心してほしい、そんな言葉を親として子に伝える難しさを、身をもって体験しました。子どもは時として本質的な問い合わせをしてくるので、ドキッとしますよね。

【死】について子に尋ねられた時。それぞれの親が“今の自分の言葉”で伝える

しかないと思っています。子どもを傷つけないための、言葉選びと心くばりをしながら。

本の部屋でお母さんたちにお伝えしきれなかったことを整理して、今のわたしがお伝えできること。それは、

「どんなに遠回りのようでも、“実体験”と“読書体験”が、【死】を含むわたしたちの複雑な世界を自分なりにつかんでいく力になる」ということです。幼児期の今なら、たとえば虫を観察したり、花を摘んだり、生き物と触れ合ったり、友だちとのいざこざで痛い思いをしたりして【命】を感じる…。自分の代わりにいろんな体験をしてくれる本の主人公や登場人物と一緒に笑ったり、悲しんだり、不思議がつたりして、その物語世界を生きる…。生の体験と内的な体験で、さまざまに感じたり、心を動かすということです。子ども時代にたくさん遊び、本に親しむ(素敵な本を読んでもらう)ことが、心の暗がりに光を放つエネルギーの基になっていきます。

さて。この絵本の紹介も少しだけさせてもらいますね。

「ちいさな死神くん」の仕事は、死んだ人を迎えていき、死の王国に連れていくこと。死んだ人たちはみんな怖がったり寒がったりするので、死神くんはため息をつく日々でした。エルスウィーズという女の子に会うまでは！

死を扱う作品でありながら、【生きるよろこび】と不思議な明るさが胸に残る。こんな絵本に出会うたび、絵本やおはなしはやっぱり、希望と肯定の文学であることに気づかされて幸せな気持ちになります。大人の深読みにも耐えることでしょう。

まずは大人として自分のために読んでみられることをオススメしたいです。ぜひ、感想を語り合いましょう。

- ・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいなと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。
① たんぽぽ組・年少組のみなさんに②年中・年長組のみなさんに③大人のみなさんには
・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刊される可能性もあります。
・ここでご紹介した絵本は藤井チズ子前理事長からいただいた寄付金で購入し、「藤井文庫」として本の部屋に所蔵しています。移動図書館でお子さんが借りていくかもしれません。背表紙の藤色の丸シールが目印です。